北村透谷における平和思想の再評価

―クエーカーと「慈善事業の進歩を望む」―

尾西康充

序

二〇〇四年は北村透谷の没後一一〇年を迎える。それを記念して北村透谷研究会では、『北村透谷とは何か』（笠間書院）を刊行した。同書に収録された論文はいずれも、執筆者の個性的な視点から透谷の文学を問いなおす試みがなされており、それらを総合すれば今日なお議論されるべき点を網羅した透谷の文学の全体像が通観できるだろう。同書に私は、文部科学省在外研究員としてオックスフォード大学に留学していたときに蒐集した資料に拠って「北村透谷とG・ブレイスウエイト―ロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から―」という論文を発表した。資料自体は黒木章氏によって紹介されたものであったが[1]、クエーカーの平和主義運動に共鳴した透谷が通訳者・翻訳者としてブレイスウエイトの許で働いていたときの様子が分かる部分を邦訳し、短い期間ではあったが、彼と労苦を共にすることで彼から平和主義運動を学び、自己の文学を形成するための思想的土壌を設えることができたことを論じた[2]。

しかし紙数の制約上、論文で触れることができなかった点がいくつか存している。ブレイスウエイトの書簡には、一八九四年五月一六日に透谷が亡くなったことを彼が知ってそれを報じようとしたという記述は見られない。すでに横浜に転居していた彼の耳には、かつて労苦を共にした日本人青年文学者の訃報が届かなかったのか、あるいはキリスト教では自殺が忌まれる行為であったので、あえて記そうとはしなかったのか、真相は不明である。その一方、透谷が没したその年は日清戦争が勃発した年でもある。日本のキリスト教徒がナショナリズムの熱狂に包まれるなかで、本来〈非戦・非暴力〉の立場を主張するはずのクエーカー教徒が戦争の賛否をめぐって分裂した。篤信の人ブレイスウエイトにとってそれは到底耐えられない事態であったと思われるのだが、彼の書簡には、それに関し

てどのような記述がなされているのか、その有無をめぐる考察を加えることで一八九四年という年を再考してみたい。

そしてさらに、これまで低い評価しか与えられてこなかった「慈善事業の進歩を望む」（「評論」第二五号、九四年六月五日）を本稿で取り上げて、ブレイスウエイトから影響を受けたと思われる透谷の平和主義思想に着目し、その思想の意義を再評価したい。ちなみに平和主義とは国家間の戦争を否定するだけでなく、相手に対して暴力をもって問題を解決しようとする行為すべてに強く反対することである。たとえば広義の平和主義として、ホイットニー（Willis Nortn Whitney）によって創立された赤坂病院を拠点とした医療活動や、茨城県内を中心とした禁酒運動、さらにまた、関東大震災に際してキリスト友会奉仕団を組織して罹災者の救援に積極的な奉仕を行ったことなど、それらクエーカー教徒の社会的実践は、彼らの平和主義思想に裏付けされた慈善活動であるといえる。透谷の「慈善活動の進歩を望む」は平和主義という概念が直接使われて論じられたものではないが、社会的実践を促すために書かれたことを考慮に入れれば、その理念を実現させる活動の一翼を担った論説であるといえる。

以上、先に触れることのできなかった二、三の点を本稿において論じることで前稿の補足としたい。

一

一八九四年八月三日、イギリス聖書協会のジョージ・ブレイスウエイト（George Braithwaite）は'Bible house breakfast'という電報をロンドンの家族の許に打電した。彼の一族は代々、平和主義を信条とする敬虔なクエーカー教徒であり、ロンドンのカムデン通り三一二番地のクエーカーハウスに居を構えていた。謎めいた内容を持つこの電報はグレートノーザン電報会社を通じて配信されるのだが、日本国内の通信封鎖のために配信が遅れた。家族が受け取った電信用紙には、日本で「通信封鎖」があったことを示す別紙が添付されている。なぜ通信が封鎖されていたのか、それは二日前に日本が清国に宣戦布告していたからであり、すでに七月二五日には朝鮮牙山湾外の豊島沖で、日清戦争の発端となる豊島沖の海戦が両国艦隊の間で行われていた。明治維新以後、富国強兵を目指して殖産興業政策を推進してきた日本政府は、大陸での植民地建設の足がかりとなる朝鮮半島の支配権を獲得すべく、清国と戦火を交えるに至ったのである。

日清戦争時、平和主義を自らの信条としていたクエーカーの人たちの間で戦争の賛否をめぐって対立が生じ、日本人信徒のグループが分裂するという事態を招いたことは、よく知られている。クエーカー発祥の地イングランドでは一七世紀以来、良心的兵役拒否などの方法を通じて非戦の立場を守ってきた。しかし日本にもたらされ

てわずか一〇年にも満たない期間では、クエーカーの信仰は根を下ろすことができず、戦争に乗じたナショナリズムの狂乱を前にして、信仰を揺るがされる者たちが出た。彼らのなかに「従軍者の慰藉奨励恤兵等」の運動をする「同志会なるもの」に加わる青年が続出したのである。[3] クエーカーのフレンド（普連土）会員でそのような運動に参加しなかったのは「西洋人及び二三の本邦人」だけだったという。

この事態を深刻に受け止めた外国ミッションは、補助金の停止や教会堂の返還を求めるなどして圧力をかけたが、平素から外国ミッションに対して日本人信徒の自治を求めていた人たちは、それを独立のための好機ととらえた。結局、ナショナリズムの興奮が高まるなか、戦争賛成派の「東京月次会」「芝普連土教会」の青年たちは「今回信仰上ノ意見ヲ異ニシ『フレンド』外国伝道会社ト従来ノ関係ヲ絶チ候」という広告を「福音新報」第五八九号（一八九四年一一月九日）に発表し、普連土教会は分裂に至る。

当時ブレイスウエイトは、イギリス聖書協会の主事という立場から「懸賞問題答案平和雑誌」全一二冊や「聖書平和之教」などの雑誌を刊行し、クエーカーの文書伝道に努めていた。一族と同様に彼もまた敬虔なクエーカー教徒であったブレイスウエイトが作成した'Bible house breakfast'という電文は、どのような意味だったのか。電文そのものからは分からないのだが、電報と同じ日に、ブレイスウエイトが妹のレイチェルに船便で送った書簡には、その答えが記されていた。[4] 彼の書簡によれば、八月三日の早朝、聖書館で火災が発生し建物が焼け落ちた。自分は衝撃を受けているが、建物には十分な保険をかけている。（イギリス聖書協会と協力関係にあったスコットランド聖書協会に連絡し救援を依頼して欲しい。二、三日のうちに自分は焼け残った書籍を競売にかけて当座をしのぐ資金を作りたい、とブレイスウエイトはこの書簡のなかで報告している。また戦時下の横浜の状況として「私は先に日本が清国に宣戦布告したと書きましたが、開戦以後この地では、清国人が当地を離れ出し、できるだけ早く故国に帰ろうとしていること以外は、すべて普段通りです」と記している。

当時の新聞を見ると、「横浜居留地の失火」という見出しで「清国人活版印刷業」の自宅一棟が全焼、その建物に隣接していた同人経営の基督教の書籍店が半焼したことが報道されている（「横浜毎日新聞」八四年八月四日）。火事があったのは新聞掲載日から数えて一昨日、つまりブレイスウエイトの聖書館が焼ける前日であった。新聞によれば、失火の原因はまだ特定されておらず、ランプの転倒によるものではなかったかと記されているが、対戦国の人たちに対する敵愾心から生じた放火であったかも知れない。ブレイスウエイトの聖書館の火事も、非戦の信仰を抱く人たちへの反感から起こった放火事件であった可能性もある。

火事の理由はともかく、ブレイスウエイトにとって、横浜での布教活動は苦難に満ちたものであった。九一年四月に築地居留地五〇番館から横浜山手一四番館に転居していたブレイスウエイトは、横浜を中心に活動を展開していたが、それは苦難に満ちていた。とくに日清戦争が始まると共に聖書館が焼け落ちた九四年は、年初からインフルエンザ、コレラ、地震と大きな災害に見舞われ続けていた。先年の濃尾大地震と比べて一層激烈であったという六月二〇日の大地震では、横浜地方の被害が甚大で、もはや当地での布教活動は絶望的であると思われた[5]。彼の書簡によれば、信徒内で不和が潜行し、多くの者が礼拝に出席しないようになったという。だがそれらの災害に見舞われたのに加えて、当時彼を悩ませていた大きな問題の一つにアメリカ聖書協会との不和があった。

一八七六年、アメリカ聖書協会は米国聖書協会を横浜に開設し聖書の印刷発行頒布に務めていた。それに続いてスコットランド聖書協会は七五年に北英国聖書会社を、イギリス聖書協会は七六年に大英国聖書会社を、いずれも横浜に開設し業務を始めた。「この小さな異教国において三社が鼎立して、それぞれの業を進めることは、あらゆる点からして無益であることは明らか」であったので、一八九〇年に三社は合同を試みた[6]。アメリカ聖書協会からはルーミス(H. Loomis, PN)、スコットランドおよびイギリス聖書協会からはブレイスウエイトが代表として合同委員会を結成し、同年七月一日、横浜海岸通四二番館に聖書館を設けた。この結果「コルポーターの配置および聖書および伝道トラクト類の頒布が最も効果的に、かつ経済的に行なわれるようになったのみならず、出版は英米におけるよりも廉価に、かつ各種の型の多くの聖書が福音印刷合資会社から印刷、発行されるようになった」[7]。だが表面上の輝かしい成果とは裏腹に、早い段階から英・北英と米間で経営方針をめぐる対立が生じていたようで、アメリカ聖書協会が合同を解消すると主張していることがブレイスウエイトの書簡にたびたび表れ、合同委員会内の内紛の一端が見られる[8]。この後、ついに一九〇三年に合同を解消して、アメリカ聖書協会は北日本(名古屋以北)を担当、イギリスおよびスコットランド聖書協会は西日本を担当することになり神戸に支社を移した。

このように現在、ロンドンのクエーカー図書館に保管されているブレイスウエイトの書簡から日清戦争が始まった頃の様子を再現してみたが、不思議なことに彼の書簡には、英米間の聖書協会の不和は記載されていたものの、開戦に際して普連土教会が分裂したことに触れるような記述は一切ない。またキリスト教史研究者の戸田徹子氏が論文「日本フレンド伝道の歴史」のなかで指摘したコーサンド(Joseph Cosand)と彼との間で生じていたとされる教会運営上の確執も伺われない[9]。ただ象徴的にいえるのは、彼の聖書館が焼け落ちた事件に見られるように、この年をもって彼の事業が頓挫して

しまうほどの重大な危機に直面していたことだけは確かであろう。

二

透谷の「慈善事業の進歩を望む」は、彼が縊死した後、「評論」第二五号（九四年六月五日）に発表された論説である。透谷が亡くなると、生前から関係の深かった「評論」は、巖本善治「透谷北村君を吊ふ」「願くは花下に死せん」を載せ、同時に透谷の未発表原稿のなかから一篇を選んで掲載し追悼の意を表した。それが「慈善事業の進歩を望む」で、掲載時にはタイトルの横に「（旧草未定稿）」という断り書きが付された。この未発表原稿がいつ書かれたのか、という基本的な事柄はもとより透谷の文学形成史を念頭におきながら総合的にこの論説を検討したのが橋詰静子氏の「『慈善事業の進歩』の執筆年代について—北村透谷研究ノートのうち」（「文藝と批評」第三巻六号、一九七一年五月）である。まず橋詰氏は、勝本清一郎氏が「慈善事業の進歩」について「実に常識的な凡庸なもの」であると批判している点を取りあげ、それを踏まえて自説を展開している。キリスト教思想によって深く啓発されたことが透谷において「実に凡庸なつまらん思想の原因」であったと決めつける勝本氏の発言は、『座談会明治文学史』（一九六一年六月、岩波書店）のなかで行われたものである。勝本氏の発言の趣旨を正確に理解するために、つぎに同書から該当部分を引用してみる。

透谷の作品をずっとみて行きますと、非常に鋭い断面のものの隣りにきわめて凡庸で常識的なものがあるんです。透谷がこんな馬鹿な常識的なことを言うのかと思うくらい、実に凡庸なつまらん思想にぶっつかるんですね。それをはっきりさせなければならない。透谷はキリスト教思想に深く啓発されている。それは透谷の長所なんです。しかし同時にキリスト教思想であったことが、実に凡庸なつまらん思想の原因なんですね。透谷の思想や文学を解くにはキリスト教思想の鍵が必要だが、キリスト教思想の持ち主にはおのれの思想の、近代日本のプロテスタント教会の常識の低さを抉る力がありません。たとえば慈善事業なんてものに透谷が過度な期待を寄せている「慈善事業の進歩を望む」なんて論文は、実に常識的な凡庸なものですね。問題はそういう凡庸さですね。非常に鋭い驚くべき、これはあとから言いますが、当時としては何人も言えなかった新しいことを、非常に鋭い切断面で打出していると同時に、片や非常に常識的なことがある。これはやはり透谷の弱点ですね。[10]

右の引用を読むと、橋詰氏が勝本氏の所論を適切に理解していたことが分かる。しかしただ一点、勝本氏の発言で見逃してはならないのは、キリスト教思想の凡庸さはその思想の持ち主が「おのれの思想の、近代日本のプロテスタント教会の常識の低さを抉る力があ

りません」と述べている点である。キリスト教信徒の、近代日本のプロテスタント教会のどこに「常識の低さ」があったのか、またそれを「抉る力」とはどのような力なのか、いずれについても残念ながら具体的な説明はなされていない。かりに私なりにそれを解釈して一例を示すならば、本稿の前章で見たように、日本のキリスト教徒全般にいえるのは対外侵略を伴った戦争に対して無批判であったことがあげられるだろう。そもそも西欧においてプロテスタント教会は、カトリック教会の教皇至上主義（ultramontanism）にもとづいた世界支配に対抗して、世俗権力と手を結びながら闘争発展したために、本来ナショナリズムを内在させたものであった。ドストエフスキーの小説は、ロシアナショナリズムの勃興を背景とするカトリック教会批判がその全編に満ちあふれている。日本においてもプロテスタント教会は、（例外となった各個教会は存したものの）国家統合を目指して大衆を動員する近代ナショナリズムに対して弱いという性質を持ち、それを抉りとる力は本質的に持ち合わせていなかったといえよう。

このように勝本氏の所論には説明不足の点が残されている。勝本氏が指摘した透谷の思想の凡庸さについて橋詰氏は「思想自体の〈凡庸〉さに異見はないのだが〈凡庸な〉思想に共鳴した透谷こそ問題ではないかと思う」として、つぎのように述べている。

思えば、『楚囚之詩』から初期評論活動で透谷が見出した突破口（現実への働きかけ）こそ、（論者註：宮崎）湖処子にはあった具体性を捨象して極めて観念的に言われた「慈善事業の進歩を望む」ではなかったろうか。それゆえに、それを表現せざるを得なかった彼までも〈凡庸な〉ということばで断じ捨て去る気には到底なれないのである。

橋詰氏によれば、透谷は個々の克服しがたい現実を捨象して、観念の次元でとらえ返すことによって、社会に一石を投じようとした。「慈善」という思想に拠ったことは凡庸かも知れないが、現実に働きかけようとした透谷の試み自体は、決して「凡庸」なものではなかったという。目の前に山積された社会問題を直視して、形而上の言葉を用いながらそれらの背後にある真相をいい当て、現実を変革させるために普遍性のある理念をうち立てるという企みは、きわめて文学的な行為であるといえよう。

凡庸さをめぐる議論だけでなく、執筆年代についても意見が分かれている。本文中に書かれた時事的な話題から推して「慈善事業の進歩を望む」が一八九一、二年頃に執筆された作品とする勝本氏に対して、橋詰氏は九〇年下半期と考える。透谷の文学形成史を念頭におけばその執筆が「楚囚之詩」と「蓬莱曲」との間になされたとするのが相応しいというのである。いつ執筆されたのかが分かる決

定的な証拠がないためにどちらの説が正しいか判然としないのだが、私の考えるところ、ブレイスウエイトのクエーカー的な平和主義思想に影響されてそれが書かれているのではないかと思われる。前稿（「北村透谷とG・ブレイスウエイト―ロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から―」）で明らかにしたように、「毎日新聞」の通訳者募集広告を見て、それに応募し採用試験に受かった透谷がブレイスウエイトの許で働きはじめたのは八九年である。正確にいうと「傭入広告／英語通弁及翻訳ノ出来得ル日本人一名傭入度候間望ノ御仁ハ小生へ御来談アレ」という新聞広告は同年七月二七日掲載、普連土女学校校長・海部忠蔵が面接官に加わった試験が八月一日実施、そのときの透谷の印象は、ブレイスウエイトの書簡によれば「彼は英語をとても正確に話す若者で、ミルトンの失楽園など英語の詩をいくつも読みこなし、また自分でも多くの日本語の詩を創作している」という良いものであった。

ブレイスウエイトに採用された直後の八月一九日、日本最初の平和主義の演説といわれる講演会が京橋区木挽町の厚生館で開催された。それは英国平和協会前書記ウイリアム・ジョーンズ（William Jones）による「英国平和協会の目的に関して」という英語演説で、当時築地大学校（後の明治学院）英語教師を務めていた石本三十郎の通訳を介して多くの青年が平和主義の理想に魅了されたといわれている。透谷はブレイスウエイトの許で講演を邦訳しそれを「基督教新聞」に掲載した。この講演会をきっかけにして〈非戦・非暴力〉の思想に目覚めた透谷は早速、一一月に普連土教会員・加藤万治らと共に日本平和会を結成し、九二年三月に同会機関誌「平和」を創刊するに至る。透谷にとってそれは自己の文学を形成するための思想的土壌を設えるきわめて貴重な期間であったと思われる。勝本説、もしくは橋詰説のいずれを採っても「慈善事業の進歩を望む」の書かれたのが、ブレイスウエイトの許で通訳者・翻訳者を務めていた頃であったということになる。先に触れたようにブレイスウエイトは九一年四月に横浜に転居してしまうので、透谷が彼の許で働いたのはわずか一年九ヶ月程であったのだが、クエーカー発祥の地イングランドから来た彼が透谷に絶大な影響を与えたことは、透谷の活動が何よりの証左となる。

三

ではつぎに「慈善事業の進歩を望む」の内容を見てみよう。冒頭では文明開化の象徴・鹿鳴館を「巍然青空を突ける建物あり、曰く侯伯貴人の歓娯する所なりと、是れ近く築かれし者なり。爰に黒塗の馬車は輻輳し、管弦や音楽や喇喨として人を楽ましむるの声起こる」と描写し、美術館や劇場、演説堂など文化施設が続々と建設されたにもかかわらず、「明治の文明実に其の表面には量る可からざるの進歩を示せり、然れども果して多数の人民之を楽しむか」と警

鐘を鳴らす。透谷は『進歩と貧困』（"Progress and Poverty", 1879）の著者ジョージ・ヘンリー（George Hemry, 1839-1897）の名前を持ち出して、明治日本社会における土地所有の不公平さを訴える。

「絶叫して今日の文明は逆歩なり」と論じたヘンリーは、固定資産税だけで国家財政を賄うという「土地単一税」を主張し、政府の土地政策の改革を求めた。透谷はつぎのようなエピソード、「近頃米国の或る政治家」が来日して「地租の額尤も多きを以て国民の幸福稍や均一を表すればなり」という賀意を述べたことを引いて、それが全くの誤解にもとづく意見であって、ヘンリーの学説が実現したのではなく、固定資産税以外の税収が全く望めないのが日本の貧しい実情だという。

然らば仮りに最幸福の国民なりと思惟せんか、行いて家々の実情を看視せよ、天寒く雪降れるに暖かき火を囲みて顔色ある者幾家かある、彼等が帰り来れる主人公を慰めん為めに供ふるの肉幾片かある、妙齢の少女頬に紅ひなく、幼少の児童手に読本なくして路傍に彷徨する者の数算ふ可きや、母病めるに児は家にありて看護する能はず出で、其の日の職業を務むれども医薬を買ふの余銭なし、共に侶に死を待ちつ、若くは自らを殺しつ、死を招き、社界は其の表面が日に月に粉飾せられ壮麗に趣くに関せず、裡面に於いて日に月に腐敗し病衰し困弊するの状を見る事豈に偶然の観念ならんや。

新しい生活スタイルを取り入れた支配者層は文明開化を謳歌したが、貧しい人々はそれを享受することなく糊口を凌ぐだけの人生を送っている。これは明治社会の〈光と陰〉を看破する透谷独特の眼識であり、他にも「時勢に感あり」（「女学雑誌」第二〇三号、九〇年三月八日）「泣かん乎笑はん乎」（同誌第二一〇号、同年四月二六日）といった評論のなかで、同様の鋭い批評眼が貫かれている。

さらに透谷はオリバー・ゴールドスミス（Oliver Goldsmith, 1728-1774）の「寒村行」（"The Deserted Village"）を引きながら、まだ日本は極悪な状態には陥っていないが「特有の貴に傲然賤を困しむる封建的圧制の力行はれ、悲しい乎愚昧なる小権力者相ふて他の無罪なる無力なる助けなく友なき多数の貧民を難やめんとしつゝある事甚だ明かなり」と指摘する。

ではどのようにすれば貧しい人々、すなわち「失望廃喪せる彼の最下級の憐れむ可き者」を救うことができるのか、透谷はその答えとして「慈善事業を発達」させることであるとする。しかしこれまで世上の注目を浴びた慈善事業は、いずれも本来の慈善の精神にもとづくものではなかったという。たとえば英船ノルマントン号水難事件で犠牲者となった日本人船客に集められた義捐金は一時の「時様的義捐」（ハヤリヨウテキギエン）でしかなかったし、憲法発布に際し

て岩崎家が貧民に施与したのは現実から目をそらせるだけの一時しのぎにしかならなかった。鹿鳴館内で開催された貴婦人慈善会や、日本橋茅場町に設けられた孤児収容施設福田会、その他貧民学校もまた慈善の目的を達することはできなかった。それはなぜなのか、透谷はつぎのように述べる。

何が故に不可なる。蓋し貧民全般の渇望する所の者は此れ聊かの慈恵金にあらずして（病ある者職めなき者等の特例を外き）富者の同情にあるなり。金あると金なきの実際上の当惑より生ずる怨恨嫌悪は甚だ少なくして彼等が人生の源泉より流れ来りたるに、其の驕傲なる風態、其の奢侈を極はめ放逸に縦横に馬を駆り車を走らして己れ等を蹂躙し奴隷視する者奈何、曰く同情のみ。同情。同情によりて来らざるの慰藉はなし。

透谷によれば、慈善事業を正しく行うためには施与する者に「同情」がなければならない。いくら寄付金を積んでも本当の慈善の精神にもとづいていなければその行為には効果がないという。「同情」、たしかにこれは軽視できない感情であるが、それだけでは社会問題が解決しないのは火を見るよりも明らかである。階級闘争を通じて社会矛盾を正すという唯物主義史観に影響された経験のある者なら、たとえ勝本氏でなくとも、透谷の主張が凡庸なものに感じられるに違いない。英訳『資本論』を透谷が読んでいたという証言もあり、妻ミナに宛てた書簡草稿（一八八七年一二月一四日）には「社界党は日一日に増加し、無産の輩は遂に有産の輩に勝ち、曲は正を打ち邪は直を亡ぼすの時も遠からずして来るべし」という一節もあるのだが、透谷がマルクス主義を正確に理解し階級闘争の展開を考えていたとはいえないだろう。

だが近世まで行われてきた仏教系の慈善事業に比してキリスト教系の活動はまだ始まったばかりであった。今日の荒んだ社会では陳腐にも聞こえる「同情」という語は、明治時代には英語の訳語として清新な響きを持っていた。[12] たとえば『哲学字彙』（東京大学三学部印行、一八八一年四月）によれば、'Sympathy'に「同情」という訳語が与えられている。これがキリスト教的なニュアンスを強く持った訳語であることは、一七世紀初めに耶蘇会宣教師が編んだ『日葡辞書』にも「ドゥヂャウ（どうぢやう）」の意味が「（後生の道）救霊の道」と記されていることからも分かる。『哲学字彙』には、'Sympathy'の類義語'Compassion'に「憐情、矜恤、憫惻、慈悲」という訳語が与えられているのだが、いずれも'passion'という語を核に持つ言葉であって、当時の清新な響きを活かしながら社会改革の必要性を訴えた透谷の「情熱」を効果的に表わしたものであった。

他方、今日では人文・社会科学の共通の知見として、近代社会においては〈正常な国民〉を標準化させるために貧者や病者、精神・

身体障害者を周縁部に形成させるという、近代システムを批判的にとらえる視点が共通認識となっている。貧者と富者、病者と健康者、障害者と健常者という分類法は、〈正常な国民〉で構成される国家統合のための相補的システムの一つである。このような今日の見方からすれば、融和を説く透谷の評論は国民統合に力を貸すだけのものといわざるを得ないのだが、当時の言説の水準からいえば、どう評価できるのか。それを考えるために、透谷がブレイスウエイトを通じて間接的に知ったと思われるイギリスの同時代の社会思想を取りあげてみよう。

一八六七年の第二次選挙法改正によって労働者の政治参加が現実のものとなった時代に、いずれの階級にもイギリスの政治を担当する能力がないと批判したのはマシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-1888）であった。彼の文芸評論が透谷に与えた影響については佐藤善也氏による精緻な論考があるので、その名は透谷研究者には馴染み深いものである。よく知られているようにアーノルドは貴族階級を「野蛮人」（Barbarians）、中産階級を「俗物」（Philistines）、労働者を「大衆」（Populace）として名付けて類型化し、とりわけデモクラシーの熱病に冒された中産階級が無秩序におかれている状況を問題視した。中産階級の特徴として、選挙法改正と地方自治の要求、自由貿易と制限なき競争、商工業者の資産形成、非国教徒の不服従、国教徒内部の抵抗など、産業革命以後に急速な社会進出を遂げた人びとの性質を描き出している。アーノルドによれば、中産階級は自由と勤勉さによって社会的な成功を収めたが、それらは自らに利益をもたらすだけの偏狭な性格であり、たとえ自立して成功を収める国民に成長しても、真に偉大な国民を形成することはできないという。

> これから五〇年、この国の中産階級が選ぶ進路によって、歴史上、決定的な転換が行われるだろう。それは、もし彼らが自分たちの地位向上のために国家に協力しないならば、また個人主義的精神を誇張し続けるならば、もし政府のあらゆる活動を妬み続けるならば、もし過去の時代への反感や旧式の考えは今や時代錯誤であることを学ぼうとしないならば……そのためにおそらく、彼らはしばらく自分たちの国を統治できなくなるのではなく、むしろ彼らは確実にそれをアメリカ化するのである。活力をもって統治をするであろうが、彼らの低い理念と教養の欠如で国を堕落させるのである。[13]

アーノルドによれば、これからのイギリス社会を変革して行く中産階級が、国家に協力せず個人主義に拘泥し、政府の活動にねたみを抱き自らの保護ばかりを主張するならば、低い教養しか持たない中産階級がデモクラシーを掲げて国家を牛耳っているアメリカのよ

うになるだろう。その結果、国家の堕落を招き、これまでイギリスが世界に誇ってきた高い精神性を損なうことになる。彼らの偏狭さを克服するためには、社会の全体性を説き、個人は国家を通してのみ自己実現できることを知らせることが必要である。社会を調和に導くものこそ真の「教養」(culture) といえる。国民を教化する国家機関として、学校と共に国民の精神的向上を目指して活動してきた国教会を利用する。このようにして国民統合を進めれば、イギリスにふさわしい平等がもたらされるという。この考えは、ベンサムやミルたちが中産階級からの圧倒的な支持を得て政府に「最大多数の最大幸福」を求めた功利主義思想と、真っ向から対立するものであった。

イギリス政治思想の研究者・清滝仁志氏によれば、デモクラシーに関するアーノルドの考え方は、文学的感性によるものではなく、勅任視学官として長期の大陸視察を行った実務経験によるものであった。そして「教養」を浸透させる担い手として「異邦人」(aliens) を考えていたという。

彼が『教養と無秩序』の中で賞賛する「異邦人」は、教養によって階級的習慣を超えた理想人として理解すべきではないか。彼の「異邦人」は、新しい社会をその教養で導くデモクラティック・エリートというべき存在である。マシューは、それぞれの階級の中に、階級精神でなく、人間精神や人間の完全性に導かれる者があり、彼らが社会の中に散在していると考えている。教養は、特権をもつ少数者が独占するものではなく、階級の偏見を超えて国民全体に浸透すべきものであった。この視点は、「教養人は平等の真の使徒である」というマシューの言葉に象徴されている。[14]

清滝氏は「異邦人」という概念に着目して、アーノルドの思想に新しい可能性を見出そうとしている。政治経済史の領域では、アーノルドは国家介入に否定的な世論を批判し、国家活動を積極的に容認した集産主義者として見られ、市場原理を重視する自由主義者から批判される。しかし国家が国民教育を保証することによって、従来貴族階級が独占していたパブリックスクールの古典教育を他の階級にも分与することができる。その結果、「教養」によって「人間」の普遍性に目覚めた「異邦人」が、階級間に存在していた意識の障壁をつき崩して、理想的な国民統合を進め始める。特権的な「知」の解放を試みている点を評価すれば、アーノルドが国家に対して大きな役割を付与しているのを否定的にのみとらえる必要はないのだが、ただ注意しなければならないのは、彼が無くそうとしているのが階級間の意識の障壁であって、階級そのものではないことである。その点は彼の限界であると共に、現代のイギリス階級社会にも

残存している限界であるといえよう。

もし彼の思想を透谷と比較するならば、「教養」が「同情」ということになるのではないか。「慈善事業の進歩を望む」の最後の部分で、透谷はつぎのように述べている。

慈善は恵与のみを意味せず、同情を以て真目的となす、願はくは志ある者、赤心の涙を以て貧者を訪らへ、願はくは社界をして此の温情によりて文明の進路を過たざらしめよ。多難なる邦家をして小人国とならしむるな、民人の性情の鋳造せらるゝや、多くは此の温情の多寡に基ける事少なからず、蒼生の安否、将(ママ)た此の事業の如何に関する事も思はざる可からず。

透谷の場合、政府に具体的な施策を提言しているのではなく、社会の矛盾に対する憤りを読者にぶつけ、社会的な関心を喚起させるために執筆している。そのため「教養」が貴族階級の特権を手放させて成り立つのに対して、「同情」には何が必要なのか、透谷の論は観念的な域に止まっている感がある。だが透谷には、自由民権運動に参加していた時代、明治新政府の下で没落した民衆と共に生きた経験があった。さらに詩人特有の感受性が現実認識を鋭敏なものにし、明治社会における急速な階級分化の様相を見抜いていたともいえるだろう。ヒューマニティーの表現を担う「詩人」の役割として透谷が述べた言葉、「宇宙の中心に大琴あり、すべての詩人はその傍に来りて、己が代表する国民の為に、己が育成せられたる社会の為に、百種千態の音を成すものなり」[15]は「教養人が平等の使徒である」というアーノルドの表現に匹敵する。貧しい人々の姿を直視していた透谷は、自己と同じ「詩人」が社会の矛盾を批判し、階級の障壁をつき崩して理想的な国民統合を進めると主張した。階級を越える主体的存在となる透谷の「詩人」がアーノルドの「異邦人」に比すべき存在であったとすれば、イギリスの同時代の社会思想と比較しても、透谷の思想は決して凡庸でなかったことが分かる。

結

地価の三パーセントという高い税率を定めた地租改正が全国で行われると、それに対する不満から全国で農民一揆が発生すると共に、それが金納とされたために農民が商品経済に巻き込まれ農民層の分解が生じた。また松方正義大蔵卿によって紙幣整理、租税の増徴というデフレ政策が断行されたために、米価が低落し農民の購買力低下と小作化を促した。他方、士族もわずかな秩禄公債では生活を維持することができず、下級士族や卒族は急速に零落して都市貧民層と大差ない状態に追いやられ、人力車夫や不熟練の日雇労働に従事するようになった。自由民権運動を主導したのは士族層で、透谷もまたその一人であった。彼らは貧窮する農村や都市のスラムを

目撃して弱者の救済を叫び、私擬憲法を草して政府とは異なる形での国民統合を図ったのであった。

自由民権運動が透谷の人生に決定的な影響を与えたのはいうまでもないが、とりわけ留意しなければならないのは、〈暴力〉に対して彼が一貫して拒否を示していることである。透谷は作品のなかで、明治新政府による暴力はいうまでもなく、民権壮士が豪毅さを尊ぶあまり家庭内で振るって見せた暴力なども批判している。暴力を拒絶する彼の意思が最もよく示されているのは、大矢正夫たち武相困民党のメンバーが爆弾テロを計画した際に、彼ら盟友と訣別した行動であろう。

また民権運動からキリスト教に転じてからも、小さな暴力さえ見逃さない態度は変わっていない。教会内で「つまらぬ批評眼をもつて他の小悪小非を穿つ」輩の偽善に満ちたやり方を批判し、「我は凡ての教会の黙了せん時に大活気の炎上すべきを信ず」と断言している。[16] 先にも述べたように、西欧においてプロテスタント教会は、カトリック教会の教皇至上主義にもとづいた世界支配に対抗して、世俗権力と手を結びながら闘争発展したために、ナショナリズムを内在させたものであった。そのため日清・日露戦争において日本のプロテスタント信徒の多くが開戦に賛成したことは決して日本の特殊事情ではなく、その教派が本質的にもっていた傾向のためであったといえる。透谷の文学は国民統合を進めるナショナリズムと結びつく一面がある。しかしこれまで透谷研究者が繰り返し強調してきたように、透谷が描き出そうとした国民像は明治新政府が目論んでいた国民ではなく、むしろそれに異議申し立てを行う〈理念としての国民〉であった。その意味では、透谷のロマン主義的な国民像は、想像の共同体を形成して国民国家の基とする近代ナショナリズムに資するものであったといわざるを得ない。だが、それは同時に社会の現実に抵抗するものであって、彼の暴力に対する一貫した拒否の姿勢は、〈非暴力・非戦〉の思想を導くものとして評価できる。

ブレイスウエイトを通じてクエーカーの信仰を教えられた透谷は、暴力を憎む平和主義を自らの信条とした。プロパガンダによって国内多数派を形成して、戦争の道を歩もうとする政府に対して、たとえ自分が少数派になっても〈非暴力・非戦〉の思想に従って暴力に反対することが「異邦人」たる「詩人」の務めだと信じたに違いない。

註

北村透谷の本文は『明治文学全集』第二九巻（『北村透谷集』、筑摩書房）に拠っている。なお本文中の旧字体は新字体に改めている。

(1) 黒木章「透谷がGeorge Braithwaiteに雇われた経緯とWilliam Jonesの平和講演会のこと —George Braithwaite資料の翻刻と紹介I—」（『聖学院大学論叢』第一六巻第一号、二〇〇三年一一月二五日）

(2) 拙稿（『透谷とは何か』、二〇〇三年五月、笠間書院）所収。

(3) 『福音新報』第五八九号（一八九四年一一月九日）

(4) 一八九四年八月三日書簡（二六×二一センチ白紙二枚、青色謄写）

れない」と記した。黒木章氏のご教示によれば、透谷が亡くなった当時、ブレイスウエイトは渡米中であったために、彼の死を知らなかったという。これは重要なご指摘であり、ブレイスウエイトが透谷の自殺をどのように考えていたのか、を知るうえで見落とすことのできない事実である。

—おにし・やすみつ、三重大学—

(5) ブレイスウエイト、九四年六月三〇日書簡（二六×二一センチ白紙二枚、青色謄写）
(6) 海老沢有道『新訂増補版日本の聖書』（一九八一年四月、日本基督教団出版局、三三四頁）
(7) 同右書、三三四～三三五頁
(8) たとえばブレイスウエイト、一八九三年二月二日および九四年六月三〇日書簡など。
(9) 戸田徹子「日本フレンド伝道の歴史」（『日本宗教史研究年報』七、一九八六年一二月、佼正出版社）
(10) 『座談会明治文学史』（一九六一年六月、岩波書店、一六六～一六七頁）
(11) ブレイスウエイト、八九年八月二日書簡（二六センチ×二一センチ、赤色罫線が印刷された白紙一枚の片面に黒色ペン書き）
(12) 斎藤和明氏のご教示による。
(13) 'Democratic education', "The complete prose works of Matthew Arnold 2", edited by R. H. Super, University of Michigan Press, 1962, pp. 25
(14) 清滝仁志『近代化と国民統合：イギリス政治の伝統と改革』（二〇〇四年一月、木鐸社、一三三頁）
(15) 「万物の声と詩人」（『文学界』第一〇号、一八九〇年一〇月三〇日）
(16) 「各人心宮内の秘宮」（『平和』第六号、一八九二年九月一五日）

追記

本稿は二〇〇四年六月五日、東京芸術劇場で行われた第二五回北村透谷研究会全国大会での研究発表に加筆修正したものです。会場でご教示下さった先生方に感謝申し上げます。

なお本稿中、私は「ブレイスウエイトの書簡には、一八九四年五月一六日に透谷が亡くなったことを彼が知ってそれを報じようとしたという記述は見ら